令和5年1月20日

令和４年度「全国学力・学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立国本中学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには，学校の状況や生徒の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があり，その上で，家庭や地域と一体となって生徒を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから，令和４年度「全国学力・学習状況調査」における本校生徒の学力や学習状況の概要について，以下のとおり公表します。

また，調査結果は，学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので，調査結果の分析，指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1　目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から，全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し，教育施策の成果と課題を検証し，その改善を図るとともに，学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況等の改善等に役立てる。さらに，そのような取組を通じて，教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2　調査期日

令和4年4月19日（火）

3　調査対象

小学校　第６学年（国語，算数，理科，児童質問紙）

中学校　第３学年（国語，数学，理科，生徒質問紙）

4　本校の参加状況

①　国語　　１１５人

②　数学　　１１５人

③　理科　　１１５人

5　留意事項

(1)　本調査は，対象となる学年が限られており,実施教科が国語，数学，理科の３教科のみであることや，必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから，本調査の結果については，生徒が身に付けるべき学力の特定の一部分であることに留意することが必要となる。

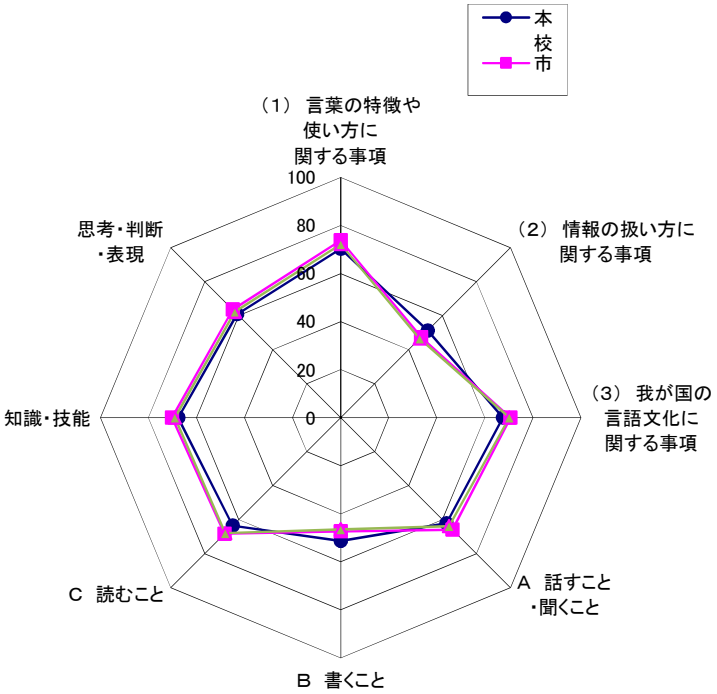
(2)　本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区分別の平均正答率などを公表した。

(3)　平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため，「本年度の状況」，「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立国本中学校第３学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の国，市と本校の状況
【国語】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域等	（1） 言葉の特徴や使い方に関する事項	70.3	73.8	72.2
	（2） 情報の扱い方に関する事項	51.3	47.3	46.5
	（3） 我が国の言語文化に関する事項	67.5	70.7	70.2
	A 話すこと・聞くこと	62.3	65.9	63.9
	B 書くこと	51.3	47.3	46.5
	C 読むこと	63.5	68.3	67.9
観点	知識・技能	67.6	70.2	69.0
	思考・判断・表現	60.9	63.6	62.3
	主体的に学習に取り組む態度			



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

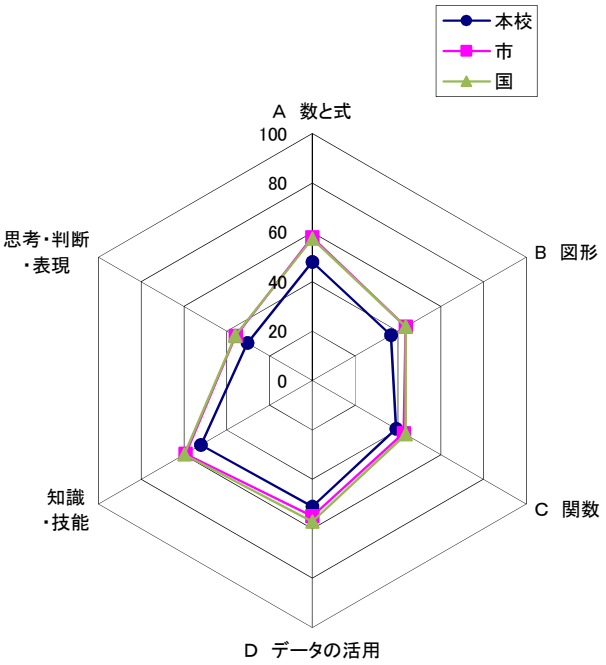
分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
（1）言語の特徴や使い方に関する事項	平均正答率は、市の平均よりも3.5、国の平均よりも1.9ポイント低い。 ○表現技法や慣用句の正答率では、平均よりも高い数値がでている。 ●意味を考えて使用する漢字や、送り仮名などの基礎的な漢字の正答率が低い。	・朝の読書での文字に親しむ習慣や、漢字や文法の補助教材学習は引き続き行い、知識の増進に努めていく。 ・復習のために、引き続き小テストを継続的に行い、知識の定着を心掛ける。
（2）情報の扱い方に関する事項	平均正答率は、市の平均よりも4、国の平均よりも4.8ポイント高い。 ○実生活で伝えられていることを正しく実践できた結果と思われる。 ●平均としては良好な結果であるが、実生活での情報の扱い方に苦手意識を持っている生徒がいる。	・情報内容の解釈はおおむねできているが、理解しただけで終わる。今後は説明文などで筋道を立てて考える問題に多く触れさせ、自分で深く考える練習をしていく。 ・情報の取捨選択がある問題を解く機会を設ける必要がある。
（3）我が国の言語文化に関する事項	平均正答率は、市の平均よりも3.2、国の平均よりも2.7ポイント低い。 ○行書の特徴にかかわる問題では、習い事に通う生徒の正答率が高めであった。 ●生活にあまり関わりのない古典や文化に対する知識欲が総じて少ない。	・古典への関心を高めるために、今後扱う古典作品について映像や学習漫画も取り入れた授業展開を行う。 ・ただの知識としての古典学習にならないように、現代との共通点や相違点の発見、生徒たちの使用語彙に合わせた説明をし、内容を理解しやすいような授業展開を心掛ける。
A 話すこと・聞くこと	平均正答率は、市の平均よりも3.6、国の平均よりも1.6ポイント低い。 ○論理の展開などに注意して聞く設問では、国平均よりも高い数値がでている。 ●わかりやすく表現を工夫することの苦手意識がうかがわれる。	・「聞くこと」に関しては、聞き取りのテストの継続実施を続けていく。 ・「話すこと」に関しては、TPOによる使い分けを実践できるように、面接指導等の指導する機会を増やしていく。 ・「話し合い」「討論」等の学習活動の充実を心掛ける。
B 書くこと	平均正答率は、市の平均よりも4、国の平均よりも4.8ポイント高い。 ○短文であれば、根拠を明確にして文を作成することができている。 ●文を書く問題での白紙回答が平均よりも少ないが、得点率につながっていない。	・作文を書き、お互いに添削することで他人に伝わりやすい表現を身につけることを目指す。 ・作文の基礎事項を復習し、話し言葉や助詞についてその都度確認しながら、最終的に書く力の向上につなげられるように授業展開してくことを心掛ける。
C 読むこと	平均正答率は、市の平均よりも4.8、国の平均よりも4.4ポイント低い。 ○心情の変化についての考察は平均との差は0.1ポイント差である。 ●「場面と場面、場面と描写などを結び付けて内容を解釈する」回答の平均との差は3.2ポイント差であり、全体像を捉えて考察する考え方が苦手ということが分かる。	・説明的文章や論理的文章の問題に多く触れさせ、その結論や根拠を探す学習を増やしていく。 ・文章問題解説の時間を作り、まずは問題を順序立てて解答するための手順を指導する。

宇都宮市立国本中学校第３学年【数学】分類・区分別正答率

★本年度の国，市と本校の状況

【数学】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域	A　数と式	48.0	58.0	57.4
	B　図形	36.8	43.6	43.6
	C　関数	39.1	42.7	43.6
	D　データの活用	51.0	54.9	57.1
観点	知識・技能	52.1	59.3	59.9
	思考・判断・表現	30.4	35.9	36.2
	主体的に学習に取り組む態度			



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

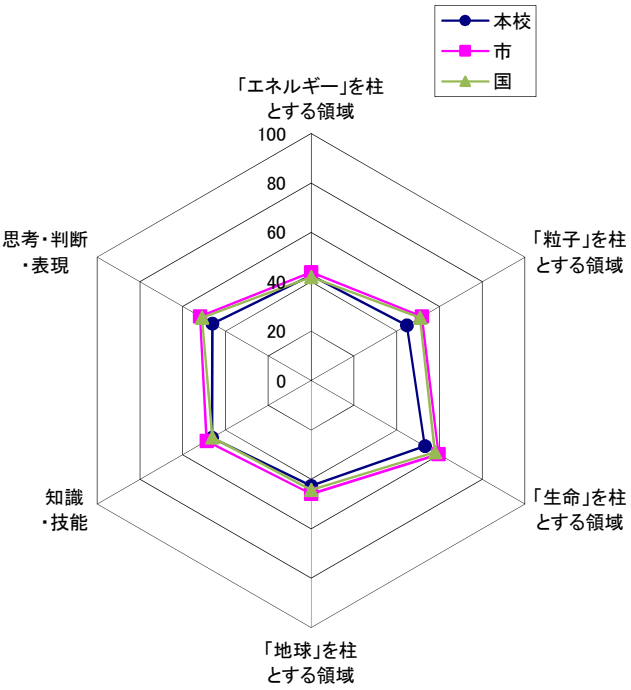
分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
A　数と式	平均正答率は、市・国の平均よりも低い。 ○素因数分解の問題では、県の平均を上回る正答率であった。素因数分解は1学年で学習するものだが、3学年で平方を求める学習の際に使用したため、復習につながり、正答率が高くなったと考えられる。 ●そのほかの問題では、市の平均を10%ほど下回っているものが多い。特に、説明を必要とする問題や、計算の意味を理解していないと解けない問題について、難しいと感じている生徒が多い。	・簡単な計算など、既習事項の確認をする時間を多く取り入れていく。 ・新たに学習する内容に関しては、繰り返し問題練習を行う中で、基本的な問題の解き方を身に着けられるよう心掛けることで、難易度の高い問題を解決する糸口になるようにする。
B　図形	平均正答率は、市・国の平均よりも低い。 ○証明の問題では、他の問題に比べて市や国の正答率に近かった。昨年度に証明の問題を学習した際に、繰り返し問題解決学習を行ったことで、正答率が高くなったと考えられる。 ●反例について答える問題では、市・国の正答率を10%ほど下回ってる。文章の意味を読みとる問題について、難しいと感じている生徒が多い。	・授業の中で既習事項を確認する時間を設けて、様々な図形の性質や条件などを繰り返し復習し、定着させる。 ・文章の中の必要な情報に下線を引かせるなど、文章の意味を読み取る力をつけさせる指導を心掛ける。
C　関数	平均正答率は、市・国の平均よりも低い。 ○座標をかく問題では、他の問題に比べて市や国の正答率に近かった。グラフや表から正しい情報を読み取ることができる生徒が多いと考えられる。 ●読み取った情報を活用する問題では市や国の正答率より4%ほど下回っている。情報を読み取るところまではできているものの、それを正しく活用できない生徒が多いと考えられる。	・関数の式の形、変化の割合の求め方など、グラフや表から情報を読み取り、それを活用して答えを求める問題に多く取り組ませる。 ・文章の内容から、比例や反比例の性質を読み取り、式の形で表せるように、文章からキーワードや必要な数量を見つけさせる指導を心掛ける。
D　データの活用	平均正答率は、市・国の平均よりも低い。 ○ヒストグラムの問題では、市や国を上回る正答率であった。データの傾向を的確に捉え，判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる生徒が多いと考えられる。 ●箱ひげ図の問題では、市や国の正答率より13%ほど下回っている。箱ひげ図の使い方を理解していない生徒が多いと考えられる。	・平均値、中央値、最頻値や、相対度数の求め方などを復習する時間を設ける。 ・箱ひげ図の有用性を理解させたうえで、課題解決学習を行い、箱ひげ図の使い方を復習する。

宇都宮市立国本中学校第３学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の国，市と本校の状況

【理科】

分類	区分	本年度		
		本校	市	国
領域	「エネルギー」を柱とする領域	42.6	43.8	41.9
	「粒子」を柱とする領域	44.7	51.8	50.9
	「生命」を柱とする領域	53.2	59.6	57.9
	「地球」を柱とする領域	42.6	45.9	44.3
観点	知識・技能	46.3	48.8	46.1
	思考・判断・表現	46.1	51.9	51.0
	主体的に学習に取り組む態度			



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
「エネルギー」を柱とする領域	平均正答率は、市の平均よりも1.2ポイント低く、国の平均よりも0.7ポイント高い。 ○全体を働かせるおおもとを指摘する設問や、フックの法則に合うグラフを選択する設問では、市・国を上回る正答率であった。 ●物体に働く力を図示し、言語化する設問や考察の妥当性について考えを深める設問では、市・国より低い正答率であった。	○身の回りの現象を注意深く観察し、興味を持つことの大切さを今後も伝えていく。 ○測定値からグラフを作成すること、グラフから何が言えるか考えることを授業の中で充実させる。 ●手押し相撲などを通して目に見えない「力」に対して興味を持たせ、実験をとしてイメージしやすい授業デザインを心掛けていきたい。
「粒子」を柱とする領域	平均正答率は、市・国よりも6ポイント以上低い。 ○モデルで表した図を基に化学反応式で表す設問は、おおむね市や国と同等の正答率であった。 ●化学変化の前後の質量の変化を問う設問や、実験の考察について課題に正対しているか考える設問では、市や国を大きく下回る正答率であった。	○学習活動全般にわたって、モデルで考えさせる活動を積極的に行っていく。 ●生徒の理解度を、AIドリルなどで把握し、順を追って考えさせ、論理的思考力を育成することが重要である。また、難問に取り組み、解いた時の充実感を味合わせたい。
「生命」を柱とする領域	平均正答率は、市・国よりも4ポイント以上低い。 ○未知の生物をアリと比較して判断する設問は、市や国の正答率を上回る結果となった。 ●異なる生物のからだのつくりを観察し、生活の場所、骨格のつくりなど共通点を探る設問では、市や国より低い正答率であった。	○授業の中で、2つの事象を比較する際に共通点と相違点を見出すことを積極的に行っていく。 ●未知の問題を考える際、あきらめずに既習事項から粘り強く考え、回答を導き出す習慣を持たせたい、
「地球」を柱とする領域	平均正答率は、国よりやや低く、市より3.3ポイント低い。 ○気圧の概念図を適切に選択する設問は、市や国の正答率を上回る結果となった。 ●地学的内容について市や国の正答率を下回る結果となった。	○物理量を学習する際に、演示や実験を組み合わせながら、概念形成を行っていきたい。 ●地学的内容については、授業等で復習の時間を取っていきたい。

宇都宮市立国本中学校 第３学年 生徒質問紙

★傾向と今後の指導上の工夫　　○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

○「毎日、同じくらいの時間に寝ていますか」に対する肯定回答の割合は84.3ポイント※全国(79.9)・県(82.8)、「毎日、同じくらいの時間に起きていますか」に対する肯定回答の割合は95.7ポイント※全国(92.2)・県(93.9)と、いずれも上回った。規則正しい生活を送る生徒が多いことが分かる。
○「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対する肯定回答の割合は98.3ポイントで、全国(96.4)・県(97.6)を上回った。
○「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」に対する肯定回答の割合は73.0ポイントで、全国(66.6)・県(70.5)を上回った。
○「人が困っているときは、進んで助けていますか」に対する肯定回答の割合は89.6ポイントで、全国(88.4)を上回った。学校行事を重視した心の育成を今後も一層進めていきたい。
○「地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがありますか」に対する肯定回答の割合は28.7ポイントで、全国(21.1)・県(22.5)を大幅に上回っている。
○「学校で、学級の生徒と意見交換をする場面で、PC・タブレットなどのＩＣＴ機器を、どの程度使っていますか」の質問に対する回答から、「週１回以上」使っている割合は全国・県と同程度で、「月１回未満」という回答の割合は20.0ポイントで、全国(28.7)・県(28.3)よりも低いことから、多くの教員がクロームブックを活用して授業計画を立てていることがうかがえる。
●「自分には、よいところがあると思いますか」に対する肯定回答の割合は69.5ポイントで、全国(78.5)よりも大幅に低い。行事の写真を掲示するなどして、自己肯定感を高めていく取組を実践していきたい。
●「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対する肯定回答の割合は93.9ポイントで、全国(95.0)・県(95.8)よりも低い。学年として、一番重視してきたことだけに、伝え方を改善していきたい。
●「自分違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」に対する肯定回答の割合は73.0ポイントで、県(80.2)よりも大幅に低くなっている。道徳など、自分と異なる意見を聞くことができる授業の充実を図りたい。
●「１・２年のときに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」に対する肯定回答の割合は60.0ポイントで、全国(67.4)・県(71.8)を大幅に下回っている。各教科の授業の中で、学んで理解したことを基に考えを整理してまとめたり、発表する授業を増やしていきたい。
●「学級の生徒との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対する肯定回答の割合は71.3ポイントで、全国(78.7)・県(82.7)を大幅に下回っている。話し合い活動を増やすとともに、自分の意見を発言しやすい学級の雰囲気づくりに努めていきたい。

宇都宮市立国本中学校（第３学年）
学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で，重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
・宇都宮モデルに基づく授業改善	生徒にとって「分かる授業」を展開するために、宇都宮モデルに基づき、めあての明示やペアワーク、グループワークなどの学習形態の工夫、授業の終末での学習内容の振り返りを全教科で実践している。	各教科の「授業の内容はよく分かりますか」の質問の肯定的回答の割合は、理科では全国の平均を上回ったものの、理科77.4、数学65.3、国語76.5ポイントと、いずれも県の平均を下回った。宇都宮モデルに基づいた授業作りに加え、上述のICT機器の活用や、学んだことを生かしながら考えをまとめる活動を推進したい。
・学びに向かう力の育成と学力の向上	定期テスト前の２週間、「家庭学習がんばりの記録」を利用し、家庭学習の時間を記入されることで、生徒自身の学習への取組状況を可視化し、個に応じて指導助言を行っている。	直接的に対応する質問項目はない。各教科の記述問題への取組に関する質問で、「すべての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した割合は、国語で全国の平均を上回ったものの、理科67.0、数学39.1ポイントと、いずれも県、全国の平均を下回った。諦めないで取り組もうとする態度を育成するために、学んだ知識を自分の言葉でまとめさせる時間を各教科で設定していきたい。
・家庭学習における学習内容の復習の習慣化に向けた指導の工夫	全学年で家庭学習の習慣化に向けた取組を行っている。また、復習するポイントを生徒が整理しやすいよう、各授業で、その日の学習内容の振り返りを行っている。	土曜日や日曜日なの学校が休みの日に勉強する時間は、県、全国の平均と比較しておおよそ同程度である。「３時間以上」と回答した割合は県、全国を上回った。平日では「２時間以上」と回答した割合は42.6ポイントで、全国(35.2)・県(36.1)を上回っている。また、「全くしない」と回答した割合は2.6ポイントで、全国・県よりも少なかったことから、家庭学習への取組は習慣化されてきていることが分かる。

★学校全体で，今後新たに重点を置いて取り組むこと

調査結果等に見られた課題	重点的な取組	取組の具体的な内容
各教科の「記述式問題」では、一部を除く多くの問題において、正答率が全国と県の平均を下回り、その無回答率は全国と県の平均を上回る結果であった。	・思考力・判断力・表現力を育成する教科指導の充実	各教科の授業において知識・技能を身につけさせるだけでなく、学んだ知識を基に説明させたり、学力調査の過去の問題に取り組ませたりすることで、各教科の学んだ知識を活用するための見方・考え方を生徒に身につけさせていく。